

報告

第38回研究大会ワークショップ

理論研究再考

—理論・モデルは社会言語科学にどう貢献するか?—

吉川 正人 (慶應義塾大学)・木本 幸憲 (名古屋大学/日本学術振興会)・

岡本 雅史 (立命館大学)・佐治 伸郎 (鎌倉女子大学)

Workshop in the 38th Congress

Rethinking Theoretical Studies:

How Can Theories and Models Contribute to Sociolinguistic Sciences?

Masato YOSHIKAWA (Keio University), Yukinori KIMOTO (Nagoya University/JSPS),
Masashi OKAMOTO (Ritsumeikan University), Noburo SAJI (Kamakura Women's University)

1. はじめに

近年、本学会における研究発表は、会話分析をはじめとする記述的研究の報告が、少なくとも数の上では趨勢を誇っており、記述の枠組みそのものを議論するような研究や、記述の結果を一般化し説明理論を与えるような、所謂「理論研究」と呼べる研究発表は寡少であると言っている。このこと自体は別段問題視されるようなことではなく、むしろ健全な記述研究の蓄積が進むことは極めて有意義なことであるが、その一方で、このいわば「記述指向性」が今後も継続され続けると、以下の2点の問題が浮上する恐れがある：

- (1) a. 記述の枠組みの正当性を顧みる機会が損なわれ、記述自体の妥当性が検証できなくなる
- b. 個々の記述が蓄積される一方でその整理・統合が進まない（「記述のガラパゴス化」）

本ワークショップは、このような問題意識から、種々の研究フィールドにおける理論の重要性を再確認し、理論研究の重要性を提示することによって(1)の問題を未然に防ぐことを目的として行われた。

具体的には、言語に関する4つの異なる研究領域

(理論言語学、語用論、記述言語学、言語心理学)からそれぞれ1名、計4名の話題提供により、以下4点について議論した：

- (2) a. 特定の理論的前提を置いた場合にのみ「見えて」くる現象がある
- b. 記述的な研究においても背景にある理論・前提に対して自覚的であるべきである
- c. 記述結果をより一般的な枠組みに位置づける（還元する）べきである
- d. 研究成果を社会へ還元する際にも理論的な下支えが極めて重要な役割を持つ

2. 社会言語科学（会）における理論の意義（吉川）

前節で提示したように、本学会における研究発表の「理論研究寡少」の傾向は、長期的に見た場合に(1)に挙げた二つの問題につながる潜在的リスクがあると考えられる。このことを論じるため、吉川は、まず理論研究の減少傾向を確認した後、上述の潜在的問題について詳述した上で、理論研究、およびそれを発表として提示する意義について考察した。

やや簡易ではあるが、理論研究の減少傾向は、学

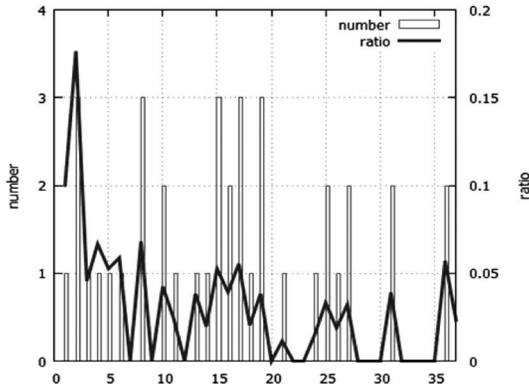


図1 理論研究発表数・比率の推移

会ウェブサイトに掲載されている発表題目を元に、吉川が主観的に理論研究かどうかを判断し選定を行った上で、各大会ごとの総数と総発表件数に占める割合を算定することで確認した。結果を図1に示す。全体として理論系発表は10%未満であることが常態であり、マイノリティであることには変わりはないが、5%前後を行き来していた理論系発表率が、第20回研究大会辺りを境に、高くとも4%程度で、0%の研究大会も目立つようになってきていることが分かる。実際、第20回研究大会までの理論系発表率は約4%であるが、21回以降は約2.4%となっている。

このような状態が今後続く場合に想定される問題としては、現象の記述に必要な「一貫した現象の切り取り方」を定める記述の原理・原則を与えるものとしての理論、および、独自に進められた記述研究を統合し説明原理を与えるためのものとしての理論、という二つの側面に関連する問題が挙げられる。

前者については、理論研究の不在が記述方法の正当性を明示的に検証する機会の喪失につながることを指摘した。これは例えば本学会第36回研究大会におけるワークショップ「発語・ジェスチャー・物理的環境の包括的記述に向けて一会話分析の可能性と課題―」（黒嶋ほか、2016）での議論などにも共通の問題意識がみとれる。また後者に関しては、理論研究が記述研究の成果を整理・統合する機会を失う危険性があることを指摘した。記述の整理・統合が新たな「現象の切り取り方」の創出につながり、

ひいては学問的ブレークスルーへと発展する可能性を秘めており、逆に言えば、その機会を喪失することは学問的な閉塞化・停滞につながり兼ねないこと論じた。これはいわば記述がそれぞれの領域で互いに干渉を受けず独自の進化を遂げていくような状態で、「記述のガラパゴス化」とでも言うべき事態である。

特にこの後者の観点から、吉川は本学会の本来的に学際的な性質に言及し、複数の研究領域における記述研究の蓄積を整理・統合し、新たな分析の枠組みを創出していく営みこそ、本学会における理論研究に求められることであると指摘した上で、近年発表された理論を複数紹介し、理論研究の意義について考察した。その一例が吉川の提唱している「社会統語論 (Sociosyntax)」という研究プログラムであり、本学会においても関連する発表を行っているが、2015年の発表（吉川、2015）では発表賞も受賞しており、学会としても理論研究は推奨されていることを示す一つの証左と考えられる。

最後に吉川は本学会の掲げる「ウェルフェアリングイスティックス (WL, 徳川, 1999)」と理論研究の関係についても考察した。一見すると応用的性質の強いWLの考えと理論研究とは相容れないアプローチであるかのように思えるが、実社会における学問的知見の影響力などを鑑みると、理想的なWLのあり方は「一定の一貫した原理に基づいた頑健な記述」の実践であると考えるべきで、そのような記述を可能にするものこそがまさに理論研究である、という議論を提示した。

3. コミュニケーション研究の「語り方」: 共有基盤の構築と更新に基づく対話可能性に向けて（岡本）

岡本は、これまでのコミュニケーション研究がどのようにコミュニケーションという対象を「捉えて」きたかという問題を、プレゼンテーションにおける「語り方」とのアナロジーでメタ的に再考し、「捉え方」としての分析がその「語り方」と不即不離の関係にあること、そして両者の関係を明らかにすることを通じて、コミュニケーション研究にとつ

て理論やモデルがどのように利用されるべきかの指針の一端を与えることを示した。

岡本は、プレゼンテーションにおける「語り方」には、語るべき対象の情報や語りの動機付け等に対する指向性と、それを伝えようとする受け手への指向性の両者が大きく関わっており、〈語り手〉と〈対象〉との関係への指向性と〈語り手〉と〈受け手〉との関係への指向性が存在することを確認した上で、これをコミュニケーション研究に当てはめ、分析者は、分析の結果として（知的）世界にどのような変化がもたらされたのかを記述することが必須であり、その前提として世界をどう切り取るかという分析対象の選択、そしてどうやって変化をもたらすのかという分析手法の選択、の二つの選択に関する説明が求められることを指摘した。

その上で、先行研究の明示的な引用や参照という、自身の研究対象や目的、研究手法がどのように当該分野において位置づけられるかを示すために行われる営みの「範囲」が、当該研究の「受け手」がその研究対象や分析手法にどの程度の知識と関心を持っていると「語り手」が想定するか、に従って決まってくることを論じた。これは語り手と受け手との間の共有知識や共有関心の基盤が事前にどの程度構築されているかに依存しており、コミュニケーション研究は、「受け手」との共有基盤をどの程度まで「語り」を構築する資源として自覚的に利用できるかによってその説得力が左右されるものであり、そして、こうしたコミュニケーション研究においてその共有基盤として機能し得るものの一つが、まさに「理論」であり「モデル」である、という議論を提示した。

ここから、あるコミュニケーション研究における記述間の一貫性や整合性を問うような「内在的批判」を行う上でコミュニケーション理論が不可欠な役割を果たすことを論じ、記述を支える理論・モデルがどのようなものであるかを聞き手側が検出し認識しなければならないような、自身の分析視点が依拠する理論やモデルに自覚的でない記述分析は、一貫性や整合性の自己点検の機会を喪失させ、読者やオーディエンスに対して処理負荷を与えることにな

ることを指摘した。同時に、問題関心を共有していない受け手による「外在的批判」が、分析対象や関心の共有をどこまで認識するかによって、共有基盤を更新することのないものに留まるか、研究間の対話の可能性を拓くものとなるのかが決まることを指摘し、その対話可能性を支えるのは、直接的には同一（ないしは類似）の現象に対する複数の異なった記述や説明であり、それらに一貫性を与える理論やモデルの自覚と認識であると主張した。

以上を踏まえた上で岡本は、理論・モデルのような確立された体系の構築以前に、コミュニケーションを「どう捉えるか」という「パースペクティブ」（コミュニケーション観）の認識こそ重要であることを論じ、それがそれぞれの研究（領域）における「術語」（e.g., 参与者, 観察者, モダリティ, ターン）に現れることから、術語に着目することで個々の研究の持つ理論的背景や妥当性、潜在的な拡張可能性を発見できる、という可能性を提示した。この実践には、術語に反映される個々の研究の概念カテゴリーをメタ分析する、という手法が考えられ、そのようなメタ分析を可能にする際に、認知言語学で言う「イメージスキーマ」に基づく概念操作が有効であることを示した。加えて、「コミュニケーションを何になぞらえているか」という、アナロジーのメタ分析も有効であり、その際には、認知言語学における「概念メタファー論」（Lakoff & Johnson, 1980）の適用が可能であることを論じ、これによって、コミュニケーション観の背景にあるアナロジーの「妥当な範囲」をメタ分析することが可能であることを示した。

4. 言語理論と個別言語の記述をどう繋ぐか： フィールド言語学における理論のあり方 （木本）

木本は、以前は理論言語学の（認知言語学）の視点から英語の研究を行っていたが、現在はフィリピンで10人しか流暢な話者が居ないアルタ語という言語のフィールドワークを行うという、極めて異種の研究活動を経験してきた研究者であり、このような背景から、理論言語学が、どのようにフィールド

ワークにおける個別言語の文法記述とつながっているのか、そしてつながるべきか、その相互依存的な関係について考察した。具体的には、個別言語の文法記述を超えたレベルでの一般化を理論的一般化と通現象的一般化に分けた上で、その3者がどのように相互作用していくべきかについて議論した。

通現象的一般化とは、特定の理論的枠組みに準拠せず、様々な言語ないし個々の現象レベルでどのような現象が観察されているかを前理論的なレベルで整理、類型化したもの (e.g., Haspelmath, 2013; Dixon, 2005) であるが、木本は、このレベルの一般化が記述と理論を繋ぐのに最も大きな役割を果たしており、文法研究にとっては、記述・理論ともに、この種の研究の利点を取り込むことが重要であることを論じた。理論的一般化と通現象的一般化は抽象度において異なり、特に「論述の特徴」と「網羅性/体系性」に特徴的な違いが出る。前者は既存の理論との差異と共通点を吟味した上で理論の特徴を素描し、言語に関する一種の原理・体系・プロセスを提示するものであるため、理論的一般化を指向した研究 (e.g., Langacker, 1987; Croft, 2001) では例外や過剰一般化を避けられないが、後者は当該現象の認定の手続きを客観的・具体的に明示化する、あるいは網羅的に当該現象に関わる下位事象を類型化する (Haspelmath, 2013) ものであり、網羅性は保証されるが、一般化のエレガントさや体系性は見過ごされるか、二の次になる、という差異がある。

以上のような差異を確認した上で、木本は、個別言語の記述とこれら二つの一般化の3者がどのような相互作用で学術研究として発展していくべきか論じた。まず記述研究と通現象的研究の間の相互作用として、記述研究は、通現象的研究の成果を取り込み、その妥当性を具体的に検証していくことが求められ、それは通現象的研究に多くの示唆をもたらすこと、また個々の地域の言語学で伝統的に用いられてきた用語も、通現象的研究の知見を盛り込んで、より通約可能な用語にすりあわせていかなければならないことを指摘した。

理論研究と通現象的研究の間の相互作用としては、体系性を重視するために個々の事例の検討は部

分的にならざるを得ない前者にとって、後者の成果を積極的に取り組むことが効果的な「リトマス試験紙」として働くこと、また一般化を提示する際に極力具体的基準やありうる下位カテゴリーを詳細に列挙することで、その一般化が実体 (substance) を持ったもの、反証されうるものになっていくことを指摘した。一方で通現象的一般化の難点は、表面には現れないものの、暗黙に前提としている理論的想定が存在し、それが一般化に影響を与えている可能性が免れないことであり、暗黙の理論的想定を明らかにし、最新の理論から見たより妥当なパラメーターの設定や、方法論的検討を与えることが求められることを指摘した。

最後に理論研究と記述研究の間にあるべき相互作用は、まだ理論によって示された方向性を具体的に検証していくことにあり、記述というのは、メタ的な道具立てが十分に利用可能であるから、研究が進むという側面があること、そしてそのように理論と記述が循環することで、質の良い記述が蓄積され、通現象的一般化を行うためのデータ・事実が集積されることを論じた。

5. 言語心理学における記述的研究の可能性 (佐治)

佐治は、心理学において「理論」と「データ」の関係が従来期待されていたものから逸脱しつつある状況を指摘し、(2b, c) で挙げた2点について論じ、またこのビッグデータ時代においては記述的研究が「データ駆動型」のアプローチとして理論の構築に大きく貢献できる可能性について議論した。

佐治は、「理論」を「研究の問いに対する答えを記述的/因果的な推論を含みながら論理的に考察したもの」、「データ」を「体系的に集められた現実の世界に関する情報の一部」(King, Keohane, & Verba, 1994) と規定し、理論は、データによって反証されることで淘汰され世界に対する理解が深まることを期待されるため、多くの反証の機会を得るための観察可能な含意をより多く含むことが望ましく、またデータは、直接理論を反証できる証拠を提出できることが望ましい (King et al., 1994)、とい

うことを確認した。その上で、近年、(言語)心理学における、「理論」と「データ」の在り方について厳しい批判が投げかけられていることを指摘した。「理論」の観点からは、近年心理学研究の再現性の低さが議論されるにつれ、心理学一般における理論の脆弱性が問題となっており (Open Science Collaboration, 2015)、「データ」の観点から言えば、心理学におけるデータ収集は理論に対するエビデンスの提出ではなく、特定の状況下における人間の行動に関するデモンストレーションを行うことが目的となりやすい (渡邊, 2016)。すなわち、理論が虚弱であれば理論に直結したデータ収集は困難になり、またデータが場当たり的に収集されたものであれば決して理論に直接貢献するようなエビデンスにならないという、悪循環が生じているという。佐治は、これを踏まえ、この悪循環を抜ける一つの可能性として、既に今現在多くある記述的研究の側が、自らの記述的特性を自覚しつつ、かつ理論への貢献を想定した総合討論を試みることにあると論じた。

その上で佐治は、言語心理学的研究において、記述的研究の形を取りながら未来の理論研究に貢献することを試みた例として、音象徴研究の例を挙げ、仮説検証型の研究と探索型の研究の役割やこれまでの貢献について議論した。音象徴とは特定の音声がある特定の意味へと結びつきやすいという現象であり、代表的なものとして、広母音が「大きい」、狭母音が「小さい」印象と結びつきやすいこと (大きさの音象徴: size-sound symbolism) や、阻害音が「鋭い」形、解放音が丸い形と結びつきやすい (形の音象徴: shape-sound symbolism) 等が挙げられる (e.g., Köhler, 1929/1947)。特にこの二種の音象徴については、1929年の報告以降様々な言語・文化間でその存在が記述的に確かめられ、相当程度頑健な現象であることが明らかになっているが、近年に至るまで、ほとんどの研究がこの「大きさ」と「形」領域に関心を集中させており、この現象を説明するための理論の含意を増やし反証の機会を増やすためには、「大きさ」「形」以外の様々な意味領域に関する拡張が不可欠である。

そこで佐治は、この点を新たな理論的関心として

学界の研究対象に据えるため行われた、従来の仮説検証型アプローチの対局となる、探索型アプローチによる研究 (Saji et al., 2013) を紹介した。当該研究では、移動様態の意味領域において日英両言語話者が持つ音象徴的直観を調べる実験が行われた。この研究は極めて探索的・記述的な研究であり、収集されたデータは何かの理論に直接寄与できるものではないが、その結果から想定できる可能性として、日英に共通/個別の音象徴を比較し、音象徴には強く身体性に動機付けられたものと、個別言語の音韻構造を反映して起こるタイプのものが混在する可能性を指摘している。以上より佐治は、一つひとつの探索的・記述的研究が理論を意識した発信を行うことによって、後続の研究の一つの方向性を提供し健全な理論構築へと収斂していくということが大いにあり得る、と結論づけた。

最後に佐治は、記述的・探索的研究が新しい理論の構築をすることへの期待が、長期的な視点から見れば今後より高まっていくものと考えられることを指摘した上で、近年大量のデータから有意なパターンを発見しようとするデータ駆動型アプローチ (data-oriented science) が仮説生成機能を強く期待されており、実際に言語・心理学分野において既に成果を上げ始めているようにも思える (e.g., Roy & Pentland, 2002) ことなどから、今後データアベイラビリティの向上によって科学研究における記述研究の役割が大きく見直される可能性があることを論じた。また一方で、パターンに「意外性」や「意味」といったものを見出すのは人間であり、それを検証可能な形に変換するのは理論であるため、このような大量データの時代であるからこそ、記述研究は理論の構築を意識し、後に続く研究者は理論を積極的に構築し、見出された理論は更に複数の研究に反証されることで、一層現象に対する理解は深まっていくものである、という見解を提示した。

6. 総合討論

以上の話題提供の後、フロアの参加者を交えた総合討論の時間を設け議論を行った。十分な時間を議論に割くことはできなかったが、短い時間ながら有

意義なコメントを複数いただくことができた。

例えば、各登壇者ごとに「理論」が示すものの想定が異なっている可能性を指摘した上で、理論の「妥当性」の検証はどのように行うべきかを問う質問を頂いた。この質問に対しては、究極的には理論の「良し悪し」を判断することはできず、常に「何をどこまで説明したいか」といった「目的」に応じて判断される相対的な評価しか行うことはできないのではないか、という見解が提示されたほか、(主に)社会科学に見られる定量・定性の対立はある種の「文化の違い」であり、岡本の言う「パースペクティブ」の衝突として捉えられる、という可能性が提示された。

また、岡本の話題提供を受け、研究における「語り手」がどのような「受け手」を想定するか、といった視点こそが重要なのではないか、というコメントをいただいた。これのコメントに対しては、「語り」という構図が従来の研究では等閑視されていた点、および研究(発表)の場ではそもそもその「受け手」が多様であるという点などが提示された。

「理論」として挙げられていたものが言語理論ばかりで、社会学の理論のような、社会を説明する理論への言及がないことの指摘、あるいは、近年の「理論研究の減少」という傾向は、データの入手可能性や分析手法の向上によって、実質的な探索的/記述的研究がようやく可能となったことによる相対的なものではないかという指摘もいただいた。前者に関しては、例えば話題提供の中でも紹介された、吉川の研究(吉川, 2015)は(旧来の言語理論とは異なり)「社会」という観点を最大限取り込んでいる点や、複数言語使用者による言語間のスイッチ、あるいは他言語の借用など、従来より社会言語学が研究の対象としてきたような現象では、社会的因子と言語との関係が強いため、社会に関する視点を内包している点などが議論された。後者に関しては、「理論の盛り上がり」から「記述の蓄積」が進み、再び理論へ焦点が移る、といったサイクルが重要なのではないか、という可能性などが議論された。

最後に、本ワークショップが大変有意義なもので

あり一回限りの企画で終わらせるべきではないため、今後継続していけるような具体的な計画を考えてはどうか、という激励のコメントも頂くことができた。

【参考文献】

- Croft, W. (2001). *Radical construction grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W. (2005). *A semantic approach to English grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Haspelmath, M. (2013). Argument indexing. In Bakker, D., & Haspelmath, M. (Eds.), *Languages across boundaries: Studies in memory of Anna Siewierska*, pp. 197–226. Berlin; Boston: Walter de Gruyter.
- King, G., Keohane, R. O., & Verba, S. (1994). *Designing social inquiry: Scientific inference in qualitative research*. Princeton: Princeton University Press. (真淵勝訳 (2004). 社会科学のリサーチ・デザイン—定性的研究における科学的推論— 勁草書房)
- Köhler, W. (1929/1947). *Gestalt psychology: An introduction to new concepts in modern psychology*. New York: Liveright.
- 黒嶋智美・城綾実・杉浦秀行・牧野遼作・チブルカぼう (2016). 第36回研究大会ワークショップ発語・ジェスチャー・物理的環境の包括的記述に向けて—会話分析の可能性と課題— 社会言語科学, 18(2), 76–81.
- Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1987). *Foundations of cognitive grammar Vol. I*. Stanford: Stanford University Press.
- Open Science Collaboration. (2015). Estimating the reproducibility of psychological science. *Science*, 349, aac4716.
- Roy, D., & Pentland, A. P. (2002). Learning words from sights and sounds: A computational model. *Cognitive Science*, 26, 113–146.
- Saji, N., Akita, K., Imai, M., Kantartzis, K., & Kita, S. (2013). Cross-linguistically shared and language-specific sound symbolism for motion: An exploratory data mining approach. *Proceedings of the 35th Annual Conference of the Cognitive Science Society*, pp. 1253–1258.
- 徳川宗賢 (1999). ウェルフェア・リングイスティックスの出発 社会言語科学, 2(1), 89–100.
- 渡邊芳之 (2016). 心理学のデータと再現可能性 心理学評論, 59(1), 98–107.
- 吉川正人 (2015). 文法性判断の社会言語学—社会統語論の目論見— 社会言語科学会第36回大会発表論文集, 26–29.